トラック5縁側にて
＊川で遊んだのちの縁側で休憩するお話
ここは全体的に涼んで落ち着いてる感じでお願いします

「ふぅ…やっぱり家が1番だね～」

「この風鈴の音と蝉の声の聞こえると夏って感じがしない？」

「だよね、あぁ～落ち着く～」

「普段は私も勉強で忙しかったりで
こうしてゆっくり夏を堪能できなくて」

「うん、本当に久しぶりに机から離れた気がするよ」

「将来？大丈夫、色々考えてるから
また決まったら話すね」

「にしても、朝は川に行って午後は縁側で涼む、何だか本当にあの頃みたいだね」

「もうあの頃ほどははしゃげないけど、結構疲れたね」

「運動不足って、兄さんだって息荒げてたじゃん」

「あぁっもう、すぐに寝転ぶんだから
ほんと、そーいうところはなんにも変わってないんだから」

「そうだ兄さん、そんなに疲れてるんだったら・・・
膝枕、してあげようか？」

「何でって…たまにはそういうのもありかなーって…」

「遠慮しなくてもいいよ？
女子高生の太ももに膝枕なんて今後一生経験できないと思うし」

「ふふっ、はいどうぞ」

「よいしょ、その位置で大丈夫？首痛くない？なら良かった」

「少しくすぐったいね…あ、良いんだよ気にしないで
兄さんはそのままでいいから」

「ゆっくりくつろいでくださいな」

「そう言えば兄さんはいつ向こうに帰るんだっけ？」

「えっ、明日なの⁉」

「折角帰ってきたのに、もっとゆっくり 休んで行ったら良いのに
…」

「そうだね、そう考えると子どもの方がいいかもね」

「あーあ、私ももうすぐ大人かぁ…」

「そうだ兄さん、明日駅まで送るよ
どうせ一人で駅まで行くんでしょ？」

「いいよいいよ、家にいたって勉強しかすることないし、
休めるうちに休んどかないとね」

「それで兄さん、次はいつ帰ってこれるの？」

「あ、いや、忙しいのは分かるんだけどさ…
またこうしてゆっくりしたいなって」

「そっか…そうだよね。分からないよね」

「でも次帰ってくる時は絶対連絡してね！絶対だよ」

「あと別に何の用事もなく、ただ寛ぎに帰ってきて良いんだから」

「叔母さん達も私も待ってるからさ」

「ふう・・・休憩のつもりが長話しちゃったね」

「ああっごめん、そんなに眠たかったの？」

「わかった、また夕方になったら起こすから
それまで寝てていいよおやすみ」